

【書評】

梅津順一・小野塚知二 編著『大塚久雄から資本主義と共同体を考える ——コモンウィール・結社・ネーション』

日本経済評論社，2018年，viii + 319頁

本書は、2016年11月に開催された「大塚久雄没後20年記念シンポジウム—資本主義と共同体」の5報告をもとにした第一部と、自由寄稿論文からなる第二部とで構成されている。

編者の梅津順一は序章で、本書の目的が、大塚の仕事を振り返ることによって「今日の時代状況への示唆」を得ることだとする。そして、戦後の大塚の研究を、近代的市場構造の成立の研究、共同体の基礎理論、「近代社会を成立・発展させていく人間の条件」としてのヴェーバーの「資本主義の精神」に関する研究の三つに分類する。しかし他方で、大塚は安保条約改定問題、日本の経済成長のあり方、発展途上国問題への取り組みなど、常に現実を意識し続けていたことも指摘し、本書の関心も、たんなる大塚の学問的業績の確認ではなく「現代のアクチュアルな問題へのヒント」にあるとする。

第1章で齋藤英里は、コモンウィールないしコモンウェルスという概念に焦点をあて、終戦前にすでに、大塚は「中産的生産者層を基軸にして構成される経済社会」としてコモンウェルスを論じているが、終戦後に日本人が目指すべき近代の人間類型を考える際にもコモンウィールを「民衆の富裕」の意味で使用し、独占や投機など「エゴイズムの自由にもとづく営利欲」への批判を込めていたという。大塚は、絶対主義を推進した「暗い国家主義的ナショナリズム」につながる「キングス・コモンウィール」と、「明るい国民主義的ナショナリズム」の基礎となる「民衆のコ

モンウィール」を区別していたが、齋藤は、大塚の「民富」の議論が現代の富の偏在の問題への批判的視座を提供していると指摘する。

第2章で小野塚知二は、大塚が描く近代資本主義の担い手である経済人は、「個別かつ独立に行動する」だけでなく、「組織化された複雑性」をもって行動する「協同的な人」であるという。小野塚が「出入り自由な共同事業/団体」と定義づける「アソシエーション」は、物・貨幣だけでなく人間関係をも含む「民富」を可能にするという。しかし、本章は、この「出入り自由」なアソシエーションは、これまでのさまざまな試みいづれにおいても不可能であったし、現代の福祉国家の諸制度は、そもそも強制加入の余計な「お節介」でさえあるという。小野塚の提起するのは、「自立・自律した諸個人」である近代人が、同時に「出入り自由な協同性」を保持することは可能であるか、という問題である。かくて本章は、大塚が『共同体の基礎理論』で問いかけた、近代人の協同性・共同性について今生きる我々がどう考えるかという問題について、悩ましくも本質的な点を提示している。

小林純は第3章で、大塚の「国民経済」の産業構造論に焦点を当て、『国富論』における歴史の「自然的コース」と大塚の「国民経済」論が「同型」であり、大塚は旧植民地帝国が国民経済を超える「膨張」であるとしていたことを確認する。小林はこの産業構造論的視角から、大塚によるオランダ型やモノカルチャー型の歪みの説明を浮きたたせ、「国

民経済」なるものは自らのうちにその産業構造を崩壊させる契機を内包していた」、つまり国民経済が「国民的利害に沿って育つのは国内の話だけであり、植民地側には通じない」という指摘を見出す。植民地体制は、国民経済内のアンバランスを国外に転嫁することになる。さらには、小林の産業構造論的視覚からすれば、EUのような先進国間の国家連合についても、域内の「格差に対する構造調整は想定されていなかった」。小林自身はEUの経済統合の行方にならざるも希望を捨ててはいないものの、この著作が刊行されてからの出来事だけを見ても、事態は決して楽観的には見られず、皮肉にも小林の指摘は当たっているともしえる。

梅津と同様に柳父圀近は第4章で、大塚がキングス・コモンウィールと本来的なコモンウィールを区別し、それぞれを「国家主義」と「国民主義」と呼んでいたことを指摘する。さらに柳父がいうには、大塚は、この国民主義の意味での近代化を進めるためには、「人間類型」こそが決定的な問題だと考え、戦前・戦後いずれにおいても日本では、「家産制的」エートスが深く根付いており、これが日本に「天皇制国家」の「国家主義」をもたらしていたという。この「家産制的恭順」の政治的エートスは、日本社会に古来からある意識であり、時代を超えて生き続けてきた。こうした大塚の考えは、内村鑑三からの影響によるものだという。内村による、藩閥政府と政商への批判、「民富を取奪する「強兵」政策への批判」は、大塚の国民経済や民富の形成の議論に継承されたと柳父は指摘する。

第5章で須永隆は、最近のイングランド地域史の成果から、17世紀のイングランドを、平場・穀作地帯-閉鎖性の教区-閉鎖型村落-所有権の集中-イギリス国教会の勢力-トーリーの支持基盤と、森林・牧畜地帯-開放性の教区-開放型村落-自由土地保有農-非国教

徒の強い勢力-ホイッグの支持基盤という二類型で示し、これは、大塚のいう当時のイングランド社会の人々のエートスの違いをよくあらわしているという。このように経済史だけではなく精神史をも含む「複眼的視点」を備えた大塚の社会分析手法は、今日でも地域経済史を扱う際に十分有効であるとされる。

第二部では、11人が寄稿し、大塚後の経済史学における「大きなものがたり」の喪失、近代における官僚制化と自由という相異なる趨勢をどうするか、形式合理性と実質合理性をどう扱うかなどさまざまな論点が出されている。しかし、第一部、第二部を通じて思ったのは、結局大塚が残したものでなによりも重要なのは、近代の「担い手」、人間類型、つまりエートスの問題だということである。このことはこれまでもいわれてきてはいたが、大塚が亡くなったころからの日本が憑りつかれている制度改革病のようなもの、つまり制度さえかえればどうにかなるという妄想が広く人々の間に伝染して久しい今だからこそ、大塚がなぜエートスにこだわったのかわかるような気がする。

最後にひとつだけ腑に落ちないことがある。本書は随所で大塚の無教会派のキリスト者の側面に触れているが、大塚自身の信仰がどのようなものであり（内村からの影響は繰り返されてはいるが）、それがどのように彼の学問に関わっているのかという点については結局わからないままである。最後の著作案内のところで、須永が『生活の貧しさと心の貧しさ』と『意味喪失の時代に生きる』をとりあげ、そこに大塚の信仰や価値意識を知るヒントを見いだしているが、とくに思想史家の視点から大塚を知ろうとするのであれば、このあたりが次なる課題となるような気がした。

(伊藤誠一郎：大月短期大学)